

論文内容の要旨およびその審査結果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 英語学・英語教育学分野	氏名	グエン トウ チャ
学位審査委員	主査 佐藤 一嘉 (教授) 副査 宇治谷 映子 (准教授) 副査 ティム マーフィー (神田外語大学 外国語学部 教授)		

1. 論文の目的

学習戦略に関する研究は、1970年代から始まり、50年近く続いているが、その効果については、必ずしも一致していない。特に、授業において導入する(トレーニング)効果については、賛否両論がある。この原因の一つとして考えられるのが、学習者ビリーフ(外国語学習に関する信念)であるが、これまで学習戦略のトレーニングと学習者ビリーフとの関係については、ほとんど研究されて来なかった(Ellis, 2008)。

この研究課題を明らかにするため、本研究は、社会文化理論の視点に基づいた実践コミュニティ(community of practice)を研究の枠組みとし、混合的研究法(量的データと質的データ)を用いて、データ収集および分析を行った。実践コミュニティとは、Lave & Wenger (1991)およびWenger (1998)の学習研究の中で提唱されたモデルであり、職場や学校がこれにあたる。コミュニティの参加者が相互交流を持続することによって、知識を共有し、アイデンティティを形成する。この理論は、経営学や応用言語学など様々な研究分野に応用されている。本研究は、本学英語教育学科2年生を対象に、前期、後期、それぞれ7週間の学習戦略・トレーニングをした結果、大学生がクラスメートに影響を受けて、どのように自らのビリーフを変化させたのかについて研究した。以下の4つを研究質問に掲げた。

- (1) 学生は、どのようなビリーフを持って学習戦略のトレーニングを受けたのか？
- (2) 学生は、学習戦略のトレーニングにどのように参加し、自分のビリーフを変えたのか？
- (3) 学生が実践コミュニティに参加し構築する中で、自身の学習者ビリーフはクラスメートからどのような影響を受けたのか？
- (4) 学習戦略・トレーニングは、学生のコミュニケーション能力をどのように高めたのか？

2. 論文の構成と内容

本論文は、5章から構成されている。

第1章では、研究課題が示された後、研究目的が明示され、4つの研究質問が提案されている。

第2章では、学習戦略、学習者ビリーフ、実践コミュニティに関する文献研究がまとめられている。初めに、それぞれの定義が明示され、これまでの研究結果が述べられ、代表的な文献についての詳細が

論文内容の要旨およびその審査結果

まとめられ、最後に研究課題が明示されている。特に、学習ストラテジー・トレーニングと学習者ビリーフとの関係については、これまでほとんど研究されてこなかったこと、そして、ほとんどの研究が質問調査などの量的データに依存し、インタビューや学習日誌などの質的データを使用していなかったことなどが課題にあげられた。その結果、本研究では、混合的研究法(量的データと質的データ)を用いることが述べられている。

第3章では、研究方法について詳しく述べられている。初めに本学英語教育学科2年生21名を対象者とし、前期7週間、後期7週間の学習ストラテジー・トレーニングの授業内容と計画の詳細が記されている。次にそれぞれのデータ収集についての説明があり(学習者ビリーフに関する質問調査、ストラテジー学習の振り返り日誌、学期末の自己評価、エッセイ:外国語学習に有効なストラテジーについて、5名のインタビュー:男子2名、女子3名、他のクラスで実施されたスピーキングとエッセイのデータ)、最後に、それぞれのデータの分析方法と混合的研究法に基づく量的データと質的データの融合について述べられている。

第4章は、大きく3つに区分され、研究結果が提示されている。初めに、学習者ビリーフの変化に関する結果が述べられている。学生は、本学に入学した際、高校までの教師中心の詰め込み型の英語授業の影響を強く受け、分析的な学習(analytic learning)に関するビリーフを強く持っていた。しかしながら、英語教育学科のコンテンツ重視の英語授業を受けて、1年後は、経験的な学習(experiential learning)に関するビリーフが大きく伸び、学生は自信(self-efficacy and confidence)を持つようになった。そして、2年次に前期7週間、後期7週間の学習ストラテジー・トレーニングを受けた結果、学生は協力的な学習(cooperative learning)に関するビリーフを強くし、自信(self-efficacy and confidence)をさらに深めた。また、分析的な学習(analytic learning)に関するビリーフが弱まったことも特徴的なことである。

2つ目は、質的データ分析(インタビュー、日誌、自己評価、エッセイ)の結果、学習者ビリーフの変化の過程について、実践コミュニティの枠組みを基に、4つの発達段階が明らかになった。第1段階は、実践コミュニティのメンバーとしての自覚の芽生えである。学生は、毎週学んだ学習ストラテジーを他の授業や授業外で実際に使用し、次週の授業で複数のクラスメートに報告する課題に毎週取り組む中で、実践コミュニティの構築を始めた。第2段階は、実践コミュニティへの積極的参加である。前期の3週目までに学生は学習ストラテジー・トレーニングにも慣れ、積極的に新しく学んだストラテジーを授業外で使用してクラスメートに報告するようになった。特に、学生は、お互いに学び合うことに影響を受け、クラスメートが使用したストラテジーを自分も使ってみようとするようになった。第3段階は、実践コミュニティを継続する困難である。夏季休暇の後、11月(8週目)に学習ストラテジー・トレーニングの授業が再開した。多くの学生は、前期に学んだ学習ストラテジーを忘れていたり、また、風邪などで欠席者が増えたりして、授業に集中できない状況があった。しかし、お互いに協力し合い、徐々に積極的に取り組むようになった。第4段階は、実践コミュニティにおける主体的メンバーとしてのアイデンティティーの確立である。実際に学習ストラテジーを使用

論文内容の要旨およびその審査結果

して、クラスメートに報告をして学びを共有し合い、実践コミュニティのメンバーとしての自覚を深めるなかで、経験的な学習 (experiential learning)に関するビリーフを大きく伸ばし、学生は自信 (self-efficacy and confidence)を持つようになった。まとめとして、質的データ分析の結果が量的データ分析(学習者ビリーフに関する質問調査)の結果を裏付けるものであり、学習者ビリーフの変化過程が明らかになった。

3つ目は、他の授業(Discussion & Debate、Academic Writing)で得られたデータの分析結果である。学生のスピーキングとライティングの伸長を測定するため、抽出された5名のペアでのスピーキング(第3週、6週、9週のビデオ会話)およびライティング(第3週、6週、9週のエッセイ)の評価をそれぞれ評価基準に基づき、3名の英語母語話者の教師に依頼した。その結果、5名のスピーキングとライティングの平均点が伸び、上位者と下位者の差が縮小したことが明らかになった。このことは、学生が実践コミュニティに積極的に参加して、お互いに学び合う中で、学習者ビリーフを変化させ、その結果、外国語の運用能力を高めたことを示唆している。

第5章は、考察であり、4つの研究質問に答えている。初めに研究結果がまとめられ、それぞれの質問について、以下のように論じられている。

(1) 学生は、本学に入学した際、高校までの教師中心の詰め込み型の英語授業の影響を強く受け、文法など正確さを重視する分析的な学習 (analytic learning) に関するビリーフを強く持っていた。しかしながら、英語教育学科のコンテンツ重視の授業を受けて、経験的な学習 (experiential learning) に関するビリーフが大きく伸び、学生は自信 (self-efficacy and confidence)を持つようになった。

(2) 学生は、学習ストラテジー・トレーニングに積極的に参加した。その結果、学生は協力的な学習 (cooperative learning) に関するビリーフを強くし、自信 (self-efficacy and confidence)をさらに深めた。また、分析的な学習 (analytic learning) に関するビリーフが弱まった。

(3) 学習者ビリーフの変化の過程について、実践コミュニティの枠組みを基に、次の4段階が明らかになった。それらは、実践コミュニティのメンバーとしての自覚の芽生え、実践コミュニティへの積極的参加、実践コミュニティを継続する困難、実践コミュニティにおける主体的メンバーとしてのアイデンティティーの確立、である。学生は、学習ストラテジーを使用して、クラスメートと学びを共有し、実践コミュニティのメンバーとしての自覚を深めるなかで、経験的な学習 (experiential learning)に関するビリーフを大きく伸ばし、自信 (self-efficacy and confidence)を深めた。

(4) 学生が実践コミュニティに積極的に参加して、お互いに学び合う中で、学習者ビリーフを変化させ、その結果、外国語の運用能力を高めた。

最後に、この研究がもたらす教育上の意味 (pedagogical implications) および今後の研究課題が述べられている。教育上の意味として、

(1) 学習ストラテジーのトレーニングは、理論的でなく、学生にとって実用的であること。

[別紙1]

論文内容の要旨およびその審査結果

(2) 教師は、学習ストラテジーに対する学生の意識・気づきを高めるような工夫が必要である。このトレーニングでは、学生は、学習ストラテジーに関する本を読み、毎回グループでディスカッションをした。

(3) 教師は、学生の相互交流を促進するため、ペア・ワーク(ペアを替えて繰り返す)やグループ・ワークを使用して、お互いに学びあう環境を構築することが大切である。

(4) 教師は、学生が学んだストラテジーを他の授業でも応用できるよう、他の教師と協力してカリキュラムを開発することが望まれる。

(5) 教師は、学生が学びの振り返り学習をするため、日誌やログ・ブックを書かせ、お互いに報告させることによって、学びを共有させることができる。

なお、この研究の限界として、(1)対象者が21名に限られていること、(2)インタビューの分析には主観が含まれること、(3)対象者が2年生であり、すでに大学でコミュニケーション重視の英語教育を受けてビリーフを変化させていること(対象者が1年生であればさらに顕著な結果がでるかもしれない)、を挙げ、今後の研究課題として、混合的研究法に基づく同様の研究が継続されることを提起している。

3. 論文審査の結果

本論文の研究テーマと研究課題の設定は、広範な文献研究に基づいたものであり、学習ストラテジーのトレーニングと学習者ビリーフとの関係について、実践コミュニティ(community of practice)を研究の枠組みとし、混合的研究法(量的データと質的データ)によるデータ収集および分析をして、学習者ビリーフの変化過程を明示したことには意義がある。特に、学習者ビリーフが安定的・静的ではなくダイナミック(dynamic)であることを示し、その発達段階を示唆したことは、第2言語習得研究の分野に貢献する研究であると評価される。

しかしながら、2、3の問題点も指摘された。初めに、学習者ビリーフに関する質問調査に関してである。本調査は、対象者が2年次(前期の8週目)の際、入学前のビリーフを振り返って、回答を求めているが、1年次の初めに調査できると正確な結果が得られた(研究の限界)。また、質問調査の結果を示した表の表記について、3回の質問調査の実施日について質問があり、申請者からの説明があった。こうした点が指摘されたが、論旨については問題がないことが確認された。

以上を総合的に判断し、本審査委員会は本申請論文が課程博士学位論文としての水準に達していると認め、委員全員が一致して合格と判定した。